講座中國近現代史　第五巻　中國革命の展開

野澤　豐・田中正俊　編

昭和五十三年八月　東京　東京大學出版會　A5判　三一九頁

さきごろ野澤豐・田中正俊の両氏を中心として、全七巻からなる論文集―講座「中國近現代史」が刊行された。本書はその第五巻である。ちなみに論文集全體は、第一巻の『中國革命の起點』から第七巻の『中國革命の勝利』までで構成されており、一九世紀なかばから中華人民共和國の成立までが時期ごとに區分され、各巻ごとにまとめられている。第五巻である本書は、一九二〇年代初頭から一九三〇年代なかばまでを對象としている。普通この時期は、國民革命期（第一次國共合作期＝一九二四―二七年）と、ソビエト革命期（國共内戦期＝一九二七―三七年）の二つの時期としてとらえられるが、本書の場合もこの時代區分にもとづいている。

日本におけるこれまでの研究では、第一次國共合作の成立により開始された國民革命は、ブルジョワジー・地主勢力を代表する蔣介石グループの反共と離反により、その可能性をたたれたとかんがえられるのがふつうである。そして反帝國主義および反封建主義という國民革命の殘された課題をになったのは、つぎにあらわれる毛澤東の井崗山ソビエト權力であるとされてきた。この結果、井崗山ソビエトにのみ今日の中華人民共和國の原點をみいだす反面、蔣介石のひきいる南京政府については、ソビエト權力にたいする敵對物であるという觀點から否定的なとらえかたしかなされてこなかったといえよう。これにたいし本書における研究では、南京政府も程度の差はあるにしても國民革命の課題をひきついだものであるとして、肯定的に位置づけようとする努力がなされている。この點が本書のもつ最大の特徴といえるであろう。もっとも所收論文のすべてがこの問題にふれているわけではない。しかし共通意識として以上のような觀點をふまえているといえよう。

巻頭の「總論」で、姫田光義氏はつぎのようにのべている。姫田氏はまず、國民革命期にあらわれた廣東國民政府、武漢政府、上海市政府、および湖南省における鄉村政權を一律に、民族的かつ民主的な性格をもった權力であったと規定する。この規定は國民革命が反帝國主義および反封建主義を課題としていたことをうらがえしてかんがえれば、當然みちびかれるものである。つづいて姫田氏は、ソビエト革命期にあらわれるソビエト權力と南京政府の關係について、この二つの權力は國民革命期にあらわれた權力の性格をそれぞれに繼承しているのであり（南京政府は廣東國民政府および武漢政府を、ソビエト權力は上海市政府および湖南省の鄉村權力を）、おなじ課題をにないつつも（民族的かつ民主的でなければならないことか）、その方法、階級、將來への展望をめぐって分裂し、對立することになったふたごであるとのべている。

姫田氏の南京政府にたいする肯定的評價はおおむね、經濟學者であるメリクセトフや中嶌太一氏の研究にもとづいている。この二人が、南京政府をささえた國民黨官僚資本が國家資本主義としての性格をそなえており、この點から南京政府の民族的、反帝國主義的な

側面をもつことを評價しようとしたことはしられている。つぎに南京政府が廣東國民政府や武漢政府などの國民革命期の權力につながるという觀點は、主として山田辰雄氏の研究がよりどころにされている。山田氏の研究は汪精衞の思想と行動を分析することにより、いわゆる國民黨左派のもっていた實質と可能性をあきらかにしようとするものである。（一般に國民黨左派は政治的展望があいまいな實力にとぼしい小集團としてしか評價されないような傾向がある。）もっとも山田氏はその研究を、南京政府の積極的評價にまで發展させてはいない。したがって姫田氏の山田説の援用のしかたには若干の疑問がのこる。しかしこの問題は小杉修二氏が所收論文のなかで檢討しているのでここではくわしくふれないことにする。

以上が「總論」でかたられている本書における中心的な研究課題である。それでは配置されている順序にしたがって、それぞれの論文を檢討していくことにしよう。

「一九二〇年代權力構造の變動とブルジョアジー」　西村　成雄。

西村論文のメリットは、ブルジョアジーの動向を南京政府との關係において、たんねんにあとづけた點にある。氏は本論を南京政府によるブルジョアジーの結集過程をえがいたものであるとのべている。「論文集」の中心課題が南京政府の肯定的評價にあることからかんがえれば、この論文が最初におかれているのは當然といえる。しかし西村論文は南京政府のもとで官僚資本が形成されていく過程を事實として指摘したにとどまっており、南京政府の性質やその後の役割などについての考察は今後の課題としてのこされている。

西村氏はまず、一九二四年九月にひらかれた「全國實業會議」に焦點をあて、その決議の內容から軍閥混戰下におけるブルジョアジーの要求をさぐろうとしている。そしてこの會議は中小の商工業ブルジョアジーが中心となってひらかれたものであること、かれらが「捐稅免除」、「裁厘實施」、「輸出稅輕減」などの要求をかかげ、產業の振興をのぞんでいたことをあきらかにする。つぎに南京政府成立後にひらかれた三つの會議、すなわち一九二七年十二月の「各省商會連合會臨時大會」、一二八年六月の「全國經濟會議」、および三〇年十一月の「全國工商會議」をとりあげ、同樣の方法でその經過をあとづけていく。そして上海の銀行資本を中心とする大ブルジョアジーがしだいに南京政府とむすびついていく一方では、中小の商工ブルジョアジーが從屬的地位におかれていく過程を克明にあとづけている。

論文の結論としては、ブルジョアジーの上層は南京政府の官僚資本主義的軌道にくみこまれ、下層は民族的危機とむすびついて南京政府と對立することになるとされている。しかしこの結論はこれまでの研究によりすでに確立されているものであるとおもわれる。さらには、くわしい記述にもかかわらず一般的なあとづけにおわってしまい、このような展開をもたらした內在的要因が、いまひとつあきらかにされていない。その原因は、第一には南京政府のもっていた政治理念がどのようなものであり、またこの政治理念がブルジョアジーを編成していくうえでどのように作用したのかという點について、充分に檢討されていないことにある。またブルジョアジーを上層・中小・金融・商工というような一般的分類だけでとらえ、かれらのもっている、より中國的な要素（たとえば地緣、血緣、人脈など）が、充分におさえられていないからであるとおもわれる。

「反帝國主義革命における中國國民黨」　小杉　修二。

小杉論文は、「總論」で言及されながらも充分に展開されていなかった問題、すなわち武漢政府と南京政府が民族・民主という共通基盤のうえで連續することを證明しようという意圖のもとにかかれている。小杉氏はまず、中嶌氏の南京政府イコール國家資本主義という考えを支持する。しかし、中嶌氏が南京政府を肯定的に評價するにもかかわらず武漢政府との連續性を否定している點に反論する。この反論において小杉氏は、國家資本主義のさまざまなパターンを分析してその非資本主義的發展の可能性をも示唆したメリクセトフの考えを援用している。しかし以上のような命題の設定にもかかわらず、武漢政府と南京政府との連續性についての分析は充分におこなわれていない。論文の中心となっているのは武漢政府の成立事情とその課題、および崩壞の原因についての分析である。この點について小杉氏は、主として山田辰雄氏の研究にもとづいて論をすすめる。そして武漢政府においては汪精衛を中心とする國民黨左派の指導により、一定の社會革命と國家資本主義的方法による反帝國主義革命權力の樹立がはかられたこと、さらには非資本主義的な發展がめざされていたことを證明しようとしている。

小杉氏は武漢政府の南京政府への連續性という問題については、論文のおわりでつぎのようにのべている。すなわち武漢政府の政治理念は一九三一年の日本の滿州占領をきっかけとする汪蔣連立政權の成立により南京政府にとりいれられることになったこと。したがってこの點から南京政府はたんに買辦的、封建的なものではなかったこと。この結果、革命の繼續をねがっていた中間層を、勞農獨裁をとなえてソビエトを樹立していた共產黨との連繫にはむかわせず、むしろ國民黨による統一にむかわせるようになったこと。抗日戰爭および日本降伏後の國共內戰という困難な情況をきりひらいたのは、これらの中間層を中心とする都市からはじまった民族統一戰線による民主共和國建設の運動であったこと。しかしこれらの問題については、氏もみずからみとめているようにただの指摘にとどまっており、今後の研究課題としてのこされているといえる。

さて論文の中心となっている武漢政府の分析であるが、小杉氏は山田氏の研究にかぎらず、これまでのおおくの研究のなかから興味ある觀點をひきだし、それらをもとにして武漢政府の可能性をさぐりだそうとしている。しかしみずからもみとめているようにオリジナルな資料操作による實證論文ではなく、分析のための理論をくみたてたというべきものである。したがっていまひとつ武漢政府の實情に卽した說得性にかけている。たとえば武漢政府の內實をしめす實例として小杉氏は、中央軍事學校が設立され、國民黨左派の主導のもとでの武裝力の創設がはかられた事實を指摘しているが、わずかに（注）でふれているだけである。この點にかぎらず、具體的な事實關係をもっとつっこんでしらべてみる必要があろう。結論において小杉氏は、武漢政府が挫折した最大の原因を、一部の共產黨員のはねあがり（農民運動における毛澤東・勞働運動における劉少奇）にもとめているといえる。

「廣東國民政府と民團」　栃木　利夫。

栃木論文は、廣東省における「民團」の實態と、廣東國民政府の「民團」對策を考察している。「民團」とは地主の指揮する自衞武裝組織であり、地方行政の最小單位という性格も持っていた。國民政府下であたらしく組織されることになった農民協會の最大の對立物であり、農民協會とひんぱんに衝突をくりかえした。したがって

民團の處理は農民問題の解決における最大の焦點であったといえる。栃木氏のねらいは、「民團」問題を考察することにより、廣東國民政府の革命政府としての實質をとうことにある。

最初に我田引水で恐縮であるが、ここでかたられている内容は、わたくし（北村）が「第一次國共合作時期の廣東省農民運動」（史林—五八卷六號、一九七五年十一月）で論じた問題を擴大し、より詳細に論じたものである。栃木氏も論文のなかで拙稿に言及しておられるので、このように斷言しても諒と解されるとおもう。

拙稿では、國民政府が「民團」の問題を積極的に解決しようとしなかったこと、かえってこれを地方行政の末端組織にくみこんで存續をはかった事實などを指摘して、廣東國民政府の國民革命遂行における限界性をあきらかにした。しかし栃木氏はこれらの事實をみとめつつも、なんとかして廣東國民政府の可能性を肯定的に評價しようとしている。すなわち廣東國民政府には農民問題を解決する意欲はあったのであるが、種々の困難のために實現しなかったというのである。そして徹底した農村革命がおこなわれた湖南の農民運動に廣東國民政府のもっていた可能性の實現をみいだすのである。

このような觀點は小杉論文とおなじく、國民黨左派を積極的に評價しようとするものである。「總論」との關係でいえば、南京政府に連續する存在としての國民革命期の權力を考察することである。結論の部分で「ブルジョア民主主義革命において民族民主的な政權が勞農勢力の民主的な革命的權力に轉化する實存的可能性は存在した」とのべていることから、栃木氏のねらいが、民族・民主をになう存在として國民黨左派を評價しようとすることであるのがわかる。しかし國民黨左派にたいする肯定的評價が最初から自明の前提とされており、敍述全體に分析的な視點がみられないため、論文としては平坦なものになってしまっている。しかしながら「民團」の實情をはじめとして、事實の記述にかんしては克明である。

以上の三篇の論文が「總論」で提起された、廣東・武漢・南京の三つの國民政府が共通の課題をもち質的に連續した存在であったという問題を、それぞれの角度から檢討したものである。しかし充分にこの問題を解明していない。このあとには農民運動や勞働運動をはじめとする個別の情況に焦點をあてた論文がつづいている。

「傳統的農民鬪爭の新展開」　三谷　孝。

三谷氏ははじめにこれまでの農民運動研究が廣東、湖南に集中しており、農民ははたらきかけられるべき對象（客體）としてしかあつかわれず、自律的な主體としてとらえようとする研究がなかった點を指摘する。そしてこれら二つの點をおぎなうものとして、一九二六年から三〇年にかけて華北を中心に展開され、農民みずからが主體となって活躍した「天門會」の活動をとりあげる。

三谷氏のねらいは表題にあるとおり、傳統的な農民運動がどのような經過をたどってあたらしい革命運動として發展していったのかを考察することにある。三谷氏はまず、「天門會」の創始者である韓根が、夢にあらわれた神仙のおつげにより會の創立を決意した點をとりあげる。そして農民にとって、夢は世俗と聖なる世界を媒介するものであると考え、夢の分析からかれらの意識形態をさぐろうとする。こうして三谷氏は農民たちを「天門會」への加入にかりたてた一つの原因が、聖なる世界への願望であったことをあきらかにし、その證據に「天門會」の會員たちが非日常的な異裝をこらしていたことや、神祕的なふんいきが會全體を支配していた事實を指摘

している。誤解をおそれずにいえば、このあたりの論のすすめかたはハイカラな感じがする。さらに、現實的には「天門會」が農民にとって、土匪や民團から自分たちを保護する實力裝置としての魅力をもっていた點を指摘する。そしてこれら二つの性格をもった「天門會」が發展していく過程を、政治的、經濟的背景をふまえてくわしくあとづけている。

本論は表題に即していえば、農民運動の傳統的發展にかんしては、すぐれた實證論文となっている。しかし論文のかなめであるはずの、傳統的な農民運動があたらしい質をそなえた組織として發展していく過程については、資料のとぼしいこともあってか、不充分な檢討しかなされていない。この點について三谷氏は、「天門會」が結局は解體してしまい、その殘黨とおもわれる人びとを、共產黨員たちが組織化したこと、そのさいにいきなり急進的なイデオロギーをもちこむのではなく、論文の前半で指摘されたたぐいの、農民たちの內的な關心に迎合するかたちで組織化がすすめられた事實を指摘しているが、表面的な指摘にとどまっている。

「轉換期の農民運動と革命權力」　坂野　良吉。

坂野論文は、國民革命期からソビエト革命期をつうじて、農民運動全般の概觀をこころみたものである。農民運動がどういう經過をたどってあたらしい革命運動として開始されたのか、そしてどのような問題をかかえながらソビエト運動へとむすびついていったのかが、要領よくまとめられている。しかし內容はすでに確認されていることばかりであり、この點は坂野氏自身もみとめているとおもわれる。したがってここでは、氏が結論として確認している論點のなかから、氏の研究方向をもっともよくしめすものをとりあげて指摘するにとどめる。

坂野氏は、結論として以下の點を確認している。すなわち中共中央は武漢政府を強化することにより非資本主義的な發展をめざしたが、農民革命を統一戰線の一翼にくみこむのに失敗してしまったこと。このあと成立したソビエト政權では民主的任務と社會主義的任務の混同がおおきな問題としてのこったこと。そしてこの問題の現實面における未解決が今日の中共の農民的社會主義論に反映されていること。以上は氏が論文のはじめで、今日の中共は六全大會（勞農獨裁によるソビエト樹立が決定された）の延長上にあるのではなく七全大會（民族統一戰線による民主連合政府の樹立が決定された）の發展上にある、とのべていることと關連しているとおもわれる。しかし今後の研究課題として指摘されているにとどまり、本稿は農民運動の概觀がその主たる內容となっている。

「中國近代產業勞働者の狀態」—一九二〇～三〇年代の中國紡績勞働者—高綱　博文。

高綱論文は、當時の中國における產業の中心であった紡績業の實態、そこにはたらく中國人勞働者の實情（上海を例としている）を分析している。氏がとくに意圖しているのは、賃勞働—資本という資本主義社會における一般的な圖式で中國の勞働者問題をかんがえるのは不可能であることを證明し、そのことから中國人勞働者が中國革命のなかで、どのような道をあゆんでいくのかをみいだそうとすることである。

高綱氏はまず、中國の民族資本による工場の經營がルーズなものであり、したがってそのルーズさをおぎない競爭力をつける必要から、苛酷な勞働と低賃金という狀態がうみだされた點を指摘する。

同時に民族資本、外國資本をとわず、雇用制度としてさまざまな前近代的な勞働請負制度が存在しており、開放された勞働市場が成立していなかったこと、したがって自由な賃金勞働者の形成がもたらされず、紡績勞働者の階級的自覺と成熟がはばまれていた點を指摘する。

これらの點についての分析は克明であり、賃勞働—資本という圖式が中國には單純には適用されないという命題を充分に解明しているといえよう。しかし以上のような分析にもかかわらず、結論として自明のことのように、このような狀態が存續するのは帝國主義の支配が原因であり、苛酷な生活を打開する必要から必然的に勞働者が民族解放運動の主要勢力として登場するかのようにのべるのは、すこし飛躍ではないだろうか。この結論をいうためには、階級的自覺を阻碍されていたはずの勞働者がどのようにして組織され、ひとつの階級として反帝鬪爭をたたかうことになったのかを解明する必要があろう。氏は本稿を勞働運動研究のためのひとつの作業假說とするとのべている。今後の研究が期待される。

補論　「中國勞働運動史の研究動向」　古山隆志、菊地敏夫。

戰後の日本における研究動向が三つの時期にわけられている。第一期は一九六〇年代までであり、中國共產黨の指導によりおおきなかたまりをみせた運動だけを對象としてとりあげていた時期。第二期は一九六〇年代後半から七〇年代前半にかけての、勞働運動の實情にできるだけ卽した個別研究がふかまった時期。第三期は日本の勞働運動史研究でえられた方法的成果が、中國の勞働運動史研究にも適用されはじめている最近の時期である。本論ではこれらのうちとくに第二期に焦點があてられ、個々の研究業績が紹介されている。そのなかでも小杉修二氏の研究がおおきくとりあげられている。小杉氏の研究は、わたしが西村成雄論文の書評で必要性を指摘した觀點（より中國的な情況をふまえること）から、中國の勞働運動の實態を解明しようとするものである。しかし本論は結論として、やはり生產點における資本と勞働との對立を基軸としたアプローチこそが大切であるとのべている。以上の結論によりまさしく本論は、所收論文で示された觀點を補完するものとなっている。

最後に今後の研究課題としてつぎのことが列擧されている。中國における資本主義發達史を產業別、地域別に克明に研究し、これにともなう勞働力の編成のされかたを解明すること。勞使關係の諸特質を、時期別、產業別にあきらかにすること。抗日民族統一戰線への結集過程である一九三〇年代、四〇年代の研究を開拓すること。

「コミンテルンと中國革命」　松元　幸子。

本論は、コミンテルン第七回擴大執行委員會總會（一九二六年十二月）で採擇された「中國問題決議」の內容を分析することが中心となっている。よくしられているようにこの時期は、中國の國民革命の波がもっともたかまり、あらたな進展方向が模索されていた時期であった。いちばん問題になっていたのは、最高潮にたっしていた湖南省の農民運動において、ソビエトを樹立すべきかいなかという問題であった。松元氏は、このソビエトの樹立という問題に焦點をあてる。そして、農民協會が湖南省で實質的な權力を掌握していたという實情にもかかわらず、なぜコミンテルンの「中國問題にかんする決議」においてソビエトの樹立が提起されず、かわりに「農民委員會」なるものの樹立が提起されたのかを總會でのスターリンの演說を檢討することによりあきらかにしようとする。

松元氏はスターリンが、ソビエトはプロレタリアによる社會主義革命の段階で樹立されるべき性質のものであり、民族・民主的性格をおびていた當面の中國革命の段階には不適當であるとかんがえていたこと、そしてこのかんがえが「決議」に反映されたことを指摘している。つづいて松元氏は、ソビエトの樹立が情況の激化により現實の問題となり、一九二八年二月のコミンテルン第九回擴大執行委員會總會の決議で正式に決定されたこと、そして中國共產黨がこの決議にもとづいてどのようにしてソビエト運動を展開していったのかを概觀している。

松元論文のメリットは、中國でソビエトの樹立がどのような曲折をへて實現されていったのか、またそれにともない、ソビエトについての概念がコミンテルンのなかでどのように變化していったのかをあとづけた點にある。しかし演說や決議の字句をとりあげるだけで、背景にあった現實の情況との關連が、充分に檢討されていない。たとえばスターリンの演說など、ずいぶんあいまいなものであり、字面だけからでは正確な解釋はできないのではないだろうか。わたしはスターリンのあいまいさの背景には、革命が激化しすぎるあまり中國にできた親ソ勢力が解體してしまうことをおそれる、現實的政治家としての立場があるとおもう。ともあれ松元氏も、論文の末尾で、今後の課題としてより多面的な角度から分析がおこなわれなければならないことを確認して筆をおいている。

「中國のソビエト運動」　遠藤　節昭、姫田　光義。

本論は中國のソビエト運動の展開（とくにその崩壞原因）を、紅軍の擴大運動に焦點をあてて考察したものである。紅軍擴大運動とは、國民黨の包圍攻擊の強化に對抗するため一九三一年からはじめられた紅軍の整備と人員の擴充をめざす運動である。

筆者は最初に、これまでのソビエト運動の研究が、毛澤東の正しい路線とこれに反對する留ソ派のあやまった路線という路線をめぐる問題に集中しているため、正確なソビエト像がとらえられていないとのべている。そしてより實證的な研究の必要性をうったえている。筆者はすでにみられる實證的な研究として、キム（Il Pyong J. Kim）やオットー・ブラウンらの業績をとりあげ、その成果にもとづきながら、適時これに反論をくわえるという方法で論をすすめていく。

筆者はまず、毛澤東と留ソ派のあいだの路線對立の存在をみとめながらも、國民黨の包圍攻擊をたえぬくためには一定の合意が不可缺であったにちがいないというかんがえから、指導部としての集中的な黨機能の存在を肯定する。そしてこの指導部のもとに、幹部の育成と大衆路線の實施を主な內容とするあたらしい指導方法が確立されつつあった點を指摘する。筆者はこのような前提にたったうえで紅軍の擴大運動に焦點をあてる。そして指導部と指導方法の確立にもかかわらずソビエトが崩壞した原因は、從來のように留ソ派のあやまった軍事路線によるというだけでは說明できず、紅軍そのものをささえる下からの力がなくなっていたことを證明しようというのである。

たしかに筆者の指摘する諸事實により、紅軍の擴大運動がうまくいかなかったらしいことはわかる。しかし擴大運動の全貌が詳細に解明されているわけではなく、表面的な概觀にとどまっている。今後の課題としては筆者もみとめているように、ソビエトの行政組織や政治改革などの實態をふまえた、より多角的な研究が必要であろう。

「轉換期の文化・思想闘爭」―蔣光慈の文學を中心に―　佐治　俊彦。

佐治論文は、五四以後から抗日戰爭にいたる中國の政治的文化的情況を背景として、中國史上はじめての共產黨員作家であった蔣光慈の思想が形成されていく過程をあとづけている。佐治氏は、革命の側にたつ文學者としてみずからを位置づけた一人の青年が、現實のはげしい政治狀況にほんろうされながらもあくまで文學固有の價値を追求し、ついには自己解體していく過程を克明にあとづけている。小生のようにもっぱら政治史にばかり目をそそいでいる人間にとって、政治的激動のなかにいきた一人の人間のいきざまに接近した本論は大きな魅力をもっており、よみごたえのある論文となっている。

ただしひとつだけわたしなりの難をいわせてもらうことにする。それは結論の部分で蔣光慈の遺稿となった小說「田野的風」をとりあげ、その主人公が革命の失敗のあと井崗山（ジンカンシャン）とおぼしき山（金剛山（ジンカンシャン））にのぼることを指摘し、かなりもってまわったいいかたをしながらも、このことが蔣光慈の、（ひいては中國文學の）すすむべき道を暗示していたかのようにのべようとしているのはどうかとおもわれる。蔣の一生は自己解體にいたる道としてえがけばよいのではなかろうか。現實とは本來殘酷なものであるはずである。

おわりに

以上わたしなりに十篇の論文についての書評をこころみてきた。しかしなにぶんにも多方面にわたる研究であり、すべてについて的確に批評するのは困難である。的はずれなところもあるかもしれない。また紙面の都合もあって、それぞれの論文の內容をくわしく檢討できなかったことをおことわりしておく。

（北村　稔）

元代勾當官の體系的研究

牧野修二著

昭和五十四年三月　東京
大明堂　A5版　二一二頁

牧野氏の新著は、元代官制の底邊をなす膨大な流外の胥吏組織に關する制度史的解明を意圖した書である。そこでは掾史、令史、典吏、書吏、司吏などの下級吏員や、貼書などの胥吏見習いのものが對象とされる。當初科擧が廢止された元代において、それまでの中國的行政組織はいかに再編されたか、中國人士大夫階層や胥吏階層が異民族支配のもとでどのような境遇におかれたかといった問題は從來人々の關心を惹きながら、複雜な胥吏層の研究にはあまり手がつけられていなかったといえよう。この意味で牧野氏によってこの分野の研究に解明のための先鞭がつけられたことには大いに意義深いものがあると考える。さらにそれは官と吏、あるいは儒と吏との交流を扱おうとするものだけに、宋代や明代の官制研究と連續させることによって、元朝史の範圍內での個別的研究に止まらず、中國史の通史的理解にも寄與すべきテーマであろう。

一

まず著者の方法にしたがって、本書の概容について述べよう。氏